

# 資料 4 - 1

令和3年(2021年)11月17日(水)  
第4回市民参加推進審議会

## 第3回八王子市市民参加推進審議会まとめ

### 【第3回での配布資料】

- ・若い世代（39歳以下）のうち、現役、就労世代（学校教育終了後）の市民参加の現状、課題、方策
- ・市民参加推進審議会（第7期）開催予定と実績
- ・第7期市民参加推進審議会＜若い世代の市民参加に向けた各年代別の区分＞
- ・市政世論調査報告書（抜粋）

### 【市民参加を促進するための現状、課題、方策についての審議方法】

#### 《会長からの提案》

～若い世代（39歳以下）のうち、現役・就労世代（学校教育終了後）の市民参加の現状、課題、方策～

＜カテゴリーは3つ＞

- 1 「すでに参加している市民」
- 2 「参加予備群の市民」
- 3 「関心がない市民」

⇒ プッシュすることで「参加」が期待できる、「参加」の方向に導けそうな市民に、どういう条件等があれば「参加」にシフトしてもらえるかを「参加予備群の市民」に焦点をあてご意見をいただく。

## 【審議内容】

### 《事例を通し出された意見》

#### ＜成人式＞

- 新成人のあいさつをお願いした学生が「恥ずかしい、うまく話せない」ということで尻込みしてしまった。経験したことを言ってもらえればよいと背中を押してあげた。相談に耳を傾け、背中を少し押してあげることで一歩踏み出せた。

#### ＜野良猫問題＞

- 地域での野良猫の糞尿問題について学生が様々な視点から改善案を調査してくれ、その結果を当該市民に報告したところ、悩みを考えてくれたことで距離感が縮まった。

#### ＜「八王子の未来」を考えるワークショップ＞

- 市民活動支援センターで夏休み中に中学・高校生対象に実施。その結果をセンター内に展示したところ、中学・高校生が足を運んでくれるようになった。

#### ＜SDGsに関する学生対象のシュミレーションゲーム＞

- 市民活動支援センターで、11月にまちづくりや地域創生を考えるSDGsに関するシュミレーションゲームを学生対象に実施する。大学コンソーシアムを通し、加盟大学へPRを実施しているが、手伝ってくれる学生も出てきた。

#### ＜八王子志民塾＞

- 市民活動支援センターで実施する活動の「八王子志民塾」への入塾動機は、地域のことかわからない、一人では何をしてもいいのかわからない、しかし、八王子のために何かをしたいというもの。卒塾生は仲間を見つけ、同志と活動を立ち上げている。

#### ＜お父さんお帰りなさいパーティー＞

- 市民活動支援センターで実施している活動で、シニアのセカンドライフ充実のため会社から地域に戻ってきたお父さんに、興味ある団体や活動、仲間を探してもらうマッチングイベントである。今後は、「地域デビューパーティー802（八王子）」にリニューアルして多世代が参加できるマッチングの場として展開する。

#### ＜ボランティア活動情報へのアクセス＞

- ボランティアに応募する場合の窓口は、市民活動支援センター、社会福祉協議会など複数あり、希望する内容を見つけ難い。

#### ＜現役世代の町会活動＞

- 町会活動が活発な地域に住んでおり、お祭り、廃品回収など、様々な行事がある。就職に伴って町会への参加が遠のき、それとともに情報も収集しなくなる。社会人は興味のある情報や職業に関連する情報であれば収集する。

#### ＜町会役員への参加＞

- 地元町会は、班長が輪番制で回ってくる。町会活動に一度参加した人の中には、町会活動への認識が深まったり、興味が出たりして、継続参加してくれる人もいる。

#### ＜ボランティア活動への参加＞

- オリンピック・パラリンピックのボランティアから考えると、目的が明確で、活動期間が限定されており参加しやすさがある。一方、長期間の活動となると仲間づくりができることも重要な要素になってくる。

#### ＜ボランティアセンターの活動＞

- 平成の一桁のころのボランティア参加者は、シニアや主婦が中心で、これらの活動が市の施策（センター元気）に活かされたこともある。今は、子育て世代が子ども食堂で活動しており、これらの人は未来の施策を担う可能性がある。ボランティア活動をしたくても、登録先は社会福祉協議会、市民活動支援センター、ファミリーサポートセンター、センター元気など様々である。情報も自分から積極的収集しないと分からない状況である。

#### ＜ゲームユーザーを巻き込む工夫例＞

- ゲーム業界には、ユーザージェネレイテッドコンテンツといったユーザーがゲームの中で自発的に遊びを作り出し楽しむ仕組みがある。これによりユーザーが新たなアイデアや活動を創出している。

#### ＜既存の市の施設を有効活用＞

- 参加のためには情報が得られることが大切だが、その方法として市民にとって身近な公共施設との連携が考えられる。情報が得られたり、顔見知りができたりすることで、公共施設や市民参加が身近なものとなり得る。

### 【第3回審議会での結論】

#### 参加予備群を議論するにも、その市民には様々な段階がある

- ①「少しのきっかけ」「参加への仕組み」「背中を押す」ことで参加できる状態、今は参加していないが参加意欲がある「参加予備群」の市民にも、参加していない障壁の理由があるはず。
- ②「参加予備群」としてひとまとめに括らず、市民の状況により参加に向かうための段階的な視点から「若い世代の市民参加の推進」のための審議会からの意見ができるとうい。

#### 地域、市のために何かをしたくても一人では何をしてよいかわからない、地域のことわからない市民がいるはず

⇒ 仲間づくりの場の提供や、散在しているボランティアなどの参加情報の窓口の一本化ができるとうい。

#### 参加の機会、きっかけ、仕組みづくりが大切

⇒ 目的が明確なこと、参加期間が短期であること、身近なわかりやすいテーマであることが大切。

仲間づくりもできるとさらなる発展につながる。

#### ボランティアなどに参加し続けるには

⇒ 自分がやりたいこと、好きなことであるかが続ける動機になる。

#### いかに情報にアプローチしやすく発信するか

- ①情報を知っていたら参加につながった人がいるかもしれない。
- ②参加してもらうには、情報が具体的で、何のための参加なのかを伝える。
- ③問題解決の手法や糸口がわかり、好転の方向に進んだ事例などを情報発信し、同様の問題で悩む市民の解決策とする。
- ④参加した市民の活動状況の見える化することで、具体的な活動状況がわかり、参加したい市民が参加の方法を知ることができれば新たな参加が生まれ、新たな活動に発展する可能性がある。



- 情報はそれぞれの「段階ごと」に発信することが大切。
- 参加の仕組みをオープンにし、分かりやすくし、発信し続けることが必要。